

学生の皆さんへ

## セレンディピティをともに

薬学部長  
篠塚 和正

セレンディピティ (serendipity) という言葉をご存じですか？イギリスの小説家兼政治家の造語ですが、薬の世界ではよく耳にします。何かを探しているときに、探しているものとは別の発想に偶然気づき、ふとしたきっかけから、新しい発見を掴むことを意味します。

人類が初めて手にした抗菌薬「ペニシリン」は、非常に初歩的な失敗から生み出されました。後にノーベル賞を受賞するフレミングが、ブドウ球菌をシャーレに培養していたところ、そのひとつにどこからかアオカビの胞子が混入し、繁殖してしまったのです。

普通でしたらシャーレはすぐに廃棄されるところですが、彼はこのアオカビの周囲に、まるで怖いものでもあるかのように、ブドウ球菌が遠巻きに生えていることに気づいたのです。何気ない現象への鋭い洞察力から、青カビ由来抗菌物質、ペニシリンが発見されたのです。まさに、「禍を転じて福と為す」ですが、決して「棚からぼた餅」ではありません。失敗や過ちを成功につなげる諦めない気持ち、上手いかなくても悲観せず常に前に進もうとする気持ちが、成功をつかむ鍵になるのです。

今、皆さんは、新型コロナ禍の中で、遠隔授業という未経験の環境下で勉強をしています。生の授業の臨場感がなく、リアルタイムの質問が出来ないもどかしさも感じていることと思います。でも視点を変えれば、何時でも何回でも講義を視聴できる、質問はメールを介して文章で返ってくる、などの利点もあるのでは？マイナス面を嘆いていても何も進みません。この状況で最大限の学習成果があがるよう、工夫して頑張ってください。学部としても、今いろいろな教育システムの企画や改善をしています。

みなさんも何かアイデアがあれば積極的に提案してください。この困難な状況をいっしょに、健康第一で乗り越えていきたいと思います。そして何かのセレンディピティをともに手に出来るといいですね。セレンディピティは「構えのある心」(the prepared mind) に訪れると言います。